

女性に判断「丸投げ」／医療チーム・倫理委なし

透析中止手続き軽視

公立福生病院（東京都福生市）の人工透析治療を巡る問題で、病院の一連の行為は、都の立ち入り検査の結果、日本透析医学会のガイドラインに照らした手続きを軽視していたことが浮き彫りになってきた。透析治療の継続か中止かを患者に選ばせる手法にも問題があったという指摘が出ている。

クロスアップ 2019

提示を「適正な医療」と断言。中止の選択肢を示さず導入・継続している透析医療界を批判した。

学会のガイドライン（2014年）は治療中止の条件を「治療自体がもたらす危険な場合②がんなどの合併症で全身状態が極めて不良な場合」という終末期に限定している。外科医らは「透析を受けない権利を患者に認めるべきだ」と主張。都の立ち入り検査でも

公立福生病院
東京都福生市と羽村市、瑞穂町の3市町で構成される福生病院組合（管理者＝加藤晋男・福生市長）が運営する公立病院。2001年4月に開設した。入院や手術が必要な患者を受け入れる2次救急医療機関で、災害時医療の中心的役割を担う都の地域災害拠点病院に指定されている。診療科数19科、病床数316床。

女性の各々がガイドラインからかけ離れていると認められてきた。厳しすぎる」とガイドライン自体を批判したという。また、外科医は「透析患者は終末期だ」と訴えているが、一方で「（女性には）透析すれば4年は生きられた」とも証言。都が問題解決の焦点と位置づけているのが、女性による透析再開の意思表示を巡る事実関係だ。外科医から治療中止の選択肢を提示されて初めて、女性は中止を選んだ。死の前日「こんな苦しいなら、また透析をしようかな」と話したが、そのまま亡くなった。外科医は「正気の時の意思に重きを置いた」と主張。また、都は病院内に医療

事実関係	透析医学会のガイドライン	病院の主張	都の行政指導
透折中止は「透折医療が4年未満で済んだ」という学外ガイドラインが定められた。学外ガイドラインが定める「透折中止」は「透折中止」という言葉がなかった。	透折中止は「透折医療が4年未満で済んだ」という学外ガイドラインが定められた。学外ガイドラインが定める「透折中止」は「透折中止」という言葉がなかった。	「透折中止は「透折医療が4年未満で済んだ」という学外ガイドラインが定められた。学外ガイドラインが定める「透折中止」は「透折中止」という言葉がなかった。	「透折中止は「透折医療が4年未満で済んだ」という学外ガイドラインが定められた。学外ガイドラインが定める「透折中止」は「透折中止」という言葉がなかった。

女性（当時44歳）の透折治療中止を巡る主な争点

インをまとめた春日井市民病院（愛知県）の渡辺有三院長は「ガイドラインは、もともと終末期で平穏な死を迎えるためのもの。若い患者を積極的に死に向かわせるためではない」と話している。

公立福生病院の人工透析治療を巡る経緯

- 2001年4月 公立福生病院開設
 - 13年4月 病院に腎臓病総合医療センターが開設され、外科医と腎臓内科医が着任
 - 14年ごろ 外科医が山健健院長（当時・副院長）に透折中止の選択肢を患者に提示することを提案し、院長も了承
 - 15年 この頃、外科医らが治療中止の選択肢の提示を始める
 - 18年8月 腎臓病患者の女性（当時44歳）が透折治療を中止して死亡
 - 19年3月 透折治療問題が毎日新聞の報道で発覚
- 東京都病院を立ち入り検査日本透析医学会が病院を立ち入り調査

「患者と考える治療」主流

女性のケースでは、人工透析治療を継続するか中止するかを外科医が本人に選ばせた。インフォームドコンセント（十分な説明に基づく同意）による自己決定を重視したという。

医療倫理に詳しい会田麻子・東京大特任教授は（外

科医らの行為は「決定の患者への丸投げで、古い考え」だと批判する。医師が全て決めることに反発した患者の権利運動は1970年代に米国で高まり、その後、自己決定やインフォームド

コンセンツの考えが世界に広まった。ただ、医学的な知識が乏しく精神的に不安定な患者が一人で決めるのは極めて難しい。最近では、医師や看護師以外にも医療ソーシャルワーカーをほしめ多くの職種が患者本人とともに考える「意思決定支援」が主流になっている。会田特任教授は「女性の『透折しない』という表面的な言葉だけで生死を決めるのではなく、揺れる気持ちに寄り添い、難しい問題と一緒に取り組んでほしい」と話している。

死亡は計21人

病院からカルテなどの提出を受けて都が確認したところ、14年ごろ以降、最初から透折治療しない「非導入」を選んで死亡した人は計17人、女性を含め治療中止を選んだ死亡した人は4人だったことが判明した。外科医らは当初、毎日新聞の取材に「非導入による死者は20人」と証言していたが、都によると、記憶違いや重複があったという。

世田谷区）の穴井えりも看護師は数年前、透折治療を拒否する腎不全患者の40代男性を担当したことがある。「死ぬのは分かっているが（治療は）嫌だ」と言う男性から話を聞くと、病気で仕事を辞め、経済的に母親に頼らざるを得ず、母親との関係も良くないことが、男性の「絶望感」につながったことが分かった。透折治療をして、できることが多くあることを説明すると、男性を見守るよう母親に促すと、男性は生きることに前向きになり、治療を始めたという。穴井さんは言う。「患者の価値観やその人生の背景を知り、課題を乗り越える力を引き出すのが意思決定支援だ」

【斎藤義彦、矢澤秀範】